

2019 年度 センター試験 倫理、政治・経済（本試験） ワンポイント解説

<p>第1問</p>	<p>問 1</p> <p>問 2</p> <p>問 3</p> <p>問 4</p> <p>問 5</p>	<p>リード文は「倫理」の第1問と同一で、設問も「倫理」の第1問からの抜粋。</p> <p>「倫理」第1問の問 1[01]と同じ。 ①近代以前に青年期はない。②近代以前も以後も通過儀礼は必要。④子どもと大人のどちらにも帰属しない人間は境界人という。</p> <p>「倫理」第1問の問 2[02]と同じ。 ①着床前診断は受精卵が8つに分裂した段階で行う。②デザイナー・ベビーの是非は現在論争中。③夫婦の受精卵を代理母に移植する場合は、子どもは代理母でなく、夫婦の遺伝子を受け継ぐ。</p> <p>「倫理」第1問の問 5[05]と同じ。 ①女子差別撤廃条約は1979年に国連総会で採択され、1980年日本も署名。②子どもの権利条約は1989年に国連総会で採択。③NPOは政府でなく民間主導。④「人間の安全保障」とは、紛争の抑止と平和の維持などの国家安全保障と異なり、一人ひとりの人間を守ることを主眼とする。</p> <p>「倫理」第1問の問 8[08]と同じ。 構造主義者はレヴィ=ストロースとフーコーである。言語論にヒントを得て、人間の意識と言動が社会構造に規定されるとしたのはレヴィ=ストロースであり、人間の意識を拘束する社会構造を明らかにすることで自由なる自己の回復を訴えたのはフーコーである。</p> <p>「倫理」第1問の問 9[09]と同じ。 ロールズは、世間に愛があれば正義もあると述べる。①正義の前提として愛がある、というのではない。②正義を行う対象は愛する者ではない。④正義のために愛を失うことには触れていない。</p>
<p>第2問</p>	<p>問 1</p> <p>問 2</p> <p>問 3</p> <p>問 4</p> <p>問 5</p>	<p>リード文は「倫理」の第3問と同一で、設問は「倫理」の第2問および第3問からの抜粋。</p> <p>「倫理」第3問の問 1[20]と同じ。 真心は本居宣長の用語で、よくも悪くも生まれたままの心という意味なので、アは誤り。清き明き心は、古代日本人の神に対する偽りのない心情をいうので、イは正しい。なお日本の神々は一般に善悪とは無関係なので、ウの「神が定めた善悪の基準」という記述は誤り。</p> <p>「倫理」第2問の問 8[18]と同じ。 ①慈悲は、生きとし生けるものすべてを対象とする。②親子や兄弟の間に生じる愛情を、様々な人間関係に広げることがを解くのは儒教である。③慈悲の実践は、特に大乘仏教で唱えられるが、上座部仏教でも否定されない。</p> <p>「倫理」第3問の問 3[22]と同じ。 仏教の観点からは、この世は無常である。『葉隠』は山本常朝の著作で、武士道を論じ、主君への絶対随順と不断の死への覚悟を説いた。</p> <p>「倫理」第3問の問 4[23]と同じ。 ④「いき(粹)」は、遊びの世界の美的理念で、さっぱりとして洗練された美意識をいう。</p> <p>「倫理」第2問の問 4[14]と同じ。 ②仁義礼智信の五常を解いたのは董仲舒である。③五蘊のうち色のみ物質的要素であり、受・想・行・識は精神作用をいう。④ブッダは諸行無常や諸法無我などを主張して、心や身体が変わらないというバラモン教の考えを否定した。</p>

第2問	問6	<p>「倫理」第3問の問8[27]と同じ。</p> <p>②西田は主客未分を説いて二元的思考を否定した。③④西田は「絶対矛盾的自己同一」という用語で、多なるものと1つの世界が互いに矛盾しながらも同一である、と考えた。</p>
第3問	問7	<p>「倫理」第3問の問9[28]と同じ。</p> <p>本文では、第2段落末尾で「あるべき身体的行為の実現と心のあり方の追求とは切り離せない」とし、第3段落半ばで「心と行為の関係を重視」とし、最終段落の冒頭で「心が行為と不可分」としており、心と行為のいずれをより重視するとはいっておらず、①②は誤り。また、本文には荻生徂徠は議論に偏る朱子を批判しているとあり、④の学問によって心を分析するという箇所は誤り。</p>
		<p>リード文は「倫理」の第4問と同一で、設問は「倫理」の第2問および第4問からの抜粋。</p>
	問1	<p>「倫理」第2問の問5[15]と同じ。</p> <p>①自由思想家のなかでジャイナ教の開祖ヴァルダマーナ(マハーヴィーラ)は、苦行によって輪廻から解脱することを解いた。②パウロは、イエスの死は人間の罪の身代わりとなった贖罪である、と考えた。④儒家の厚葬説(手厚い埋葬)に対し、墨家は薄葬(簡単な埋葬)を主張した。</p>
	問2	<p>「倫理」第2問の問1[11]と同じ。</p> <p>①プラトンが真実としたのはイデアのみであって、自然界の諸事物ではない。③ストア派は、自然の理法と理性を同一視した。④キリスト教もユダヤ教と同様に神による万物の創造を認める。</p>
	問3	<p>「倫理」第4問の問2[30]と同じ。</p> <p>「種族のイドラ」は、人間共通の感覚や精神の制約によって生じる偏見である。「劇場のイドラ」は、伝統や権威のある学説を盲信することから生じる偏見である。</p>
	問4	<p>「倫理」第4問の問4[32]と同じ。</p> <p>①③ヘーゲルによれば、外面的法と内面的道徳が弁証法的に統合されて人倫となる。また④でいうように、国家同士を争わせて対立状態に至る、とは主張されていない。なお「理性の狡知」とは、絶対精神が人間の衝動などを利用して、自由実現のための道具とすることをいう。</p>
	問5	<p>「倫理」第4問の問7[35]と同じ。</p> <p>②ダーウィンの進化論は、生物の種はそれぞれ固有の祖先から変化してきたという説であるので、「変化することはない」は誤り。③スペンサーによれば、社会は強制的軍事社会から自発的産業社会へと進化するので、「軍事的指導者が支配する社会へと進化」は誤り。④スペンサーの適者生存のメカニズムは、自然界にも社会にも適応される法則であり、国家が人為的に統制するものではない。</p>
	問6	<p>「倫理」第4問の問8[36]と同じ。</p> <p>②「個人の不運は…いつかは必ず解決される」とは述べられていない。③「悪しき出来事も人間の力によってすべて最善の運命へと変え得る」とは主張されていない。④「運命の行く末全体はあらかじめ見通せる」とは述べられていない。</p>

第4問		<p>リード文は「政治・経済」の第1問と同一で、設問も「政治・経済」の第1問からの抜粋。</p> <p>問1 「政経」第1問の問 1[01]と同じ。裁判所に関する基本的な出題。知的財産高等裁判所は、東京高等裁判所の特別支部であって特別裁判所ではない点に留意しておきたい。</p> <p>問2 「政経」第1問の問 3[03]と同じ。国民経済計算に関する基本的な出題。海外からの純所得とは、海外から受け取った所得から海外に支払った所得を控除したもの。経常海外余剰とは、輸出から輸入を控除した純輸出に海外からの純所得を加えたもの。</p> <p>問3 「政経」第1問の問 4[04]と同じ。条約とは国家間の成文化された合意のことを指す。正解となった第2 選択議定書は死刑廃止条約とも呼ばれ、日本は署名も批准もしていない。</p> <p>問4 「政経」第1問の問 5[05]と同じ。アは「二酸化炭素の総排出量が現在最も多い国」という記述から中国、イは「2012 年に WTO に加盟」という記述からロシア、ウは「国連環境開発会議が開催された」という記述からブラジルと判断できる。あとは、グラフを丁寧に読み取れば正解に到達できる。9 択であったが、それほど難しい印象はない。</p> <p>問5 「政経」第1問の問 6[06]と同じ。排他的経済水域の意味をしっかりと理解していれば、他で迷っても正解に到達できる。なお、①は公海自由の原則に反する。②は大陸棚認定があれば 200 海里超も認められるので誤り。③の領海は 12 海里なので不適切。</p> <p>問6 「政経」第1問の問 7[07]と同じ。内閣の権限をしっかりと理解していれば、正解に到達できる基本的な出題。</p> <p>問7 「政経」第1問の問 9[09]と同じ。量的緩和政策は、市中銀行が日銀に持つ当座預金口座の残高を対象としているため、「政策金利」と示す③が誤り。①のデリバティブ、②のヘッジファンド、④のコール市場は教科書にも掲載されている事項である。『参考書』に頼る前に『教科書』をしっかりと仕上げておきたい。</p> <p>問8 「政経」第1問の問 10[10]と同じ。A は有限責任社員だけで設立できる会社企業は、株式会社のみならず合同会社も該当するから不適切。B は合同会社ではなく合資会社なので不適切。</p>
-----	--	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

第5問		<p>リード文は「政治・経済」の第3問と同一で、設問も「政治・経済」の第3問からの抜粋。</p> <p>問1 「政経」第3問の間2[20]と同じ。現行犯は令状不要。②はいわゆる黙秘権で憲法第38条。③は憲法第36条に規定。④は憲法第31条の法定手続きの保障に由来する推定無罪の原則。</p> <p>問2 「政経」第3問の間4[22]と同じ。イは自己決定権。エホバの証人輸血拒否訴訟を想起すればよい。</p> <p>問3 「政経」第3問の間5[23]と同じ。Bについては、大日本帝国憲法第35条には「衆議院ハ選挙法ノ定ムル所ニ依リ公選セラレタル議員ヲ以テ組織ス」と規定されているため、明治憲法でも現行憲法でも規定されていることになる。</p> <p>問4 「政経」第3問の間6[24]と同じ。衆議院の優越事項を正確に把握していれば、正文は容易に選択できる。①の訴追同意は内閣総理大臣の権限(第75条)。②の恩赦などの決定は内閣の権限(第73条)。④の下級裁判所裁判官の任命は内閣の権限(第80条)。</p> <p>問5 「政経」第3問の間7[25]と同じ。アは議員と長の両方を選んでいる点に注目。イは地方議会と国会では異なる点に留意。ウは首長とは別個の執行機関に注目。知識事項を丁寧に整理しておくことがカギとなる。</p>
第6問		<p>リード文は「政治・経済」の第4問と同一で、設問も「政治・経済」の第4問からの抜粋。</p> <p>問1 「政経」第4問の間1[27]と同じ。保護貿易政策という記述と『経済学の国民的体系』という著書で、リストであることは明白。</p> <p>問2 「政経」第4問の間4[30]と同じ。アとウはグラフの読み取りだけで判断可能。イは消費税率が5%の期間は1997～2014年であることを知らないと判断できないが、2019年10月に消費税率が引き上げられるタイミングであったことから、受験生は消費税については丁寧に学んでいたことと推察する。</p> <p>問3 「政経」第4問の間5[31]と同じ。環境保全政策としては、すべての選択肢が正しいと言えるが、「市場メカニズムを通じて」という条件に注目すれば判断可能である。②の「操業停止を命ずる」ことは、市場への政府の介入であって、市場メカニズムを通じたものとは言えない。設問の趣旨をきちんと理解したかどうかのカギとなる。</p> <p>問4 「政経」第4問の間7[33]と同じ。アは「都市の中心部に集中」に注目して「コンパクトシティ」。仮にこの言葉を知らなくても、「ミニマム・アクセス」でないことは明白。イの「ふるさと納税」はテレビコマーシャル等で十分浸透している言葉であろう。</p> <p>問5 「政経」第4問の間8[34]と同じ。③の「水鳥の保護」はラムサール条約なので誤り。基本的な出題。</p>